

ダンス教育をめぐる境界を超え、未来へつなぐ

ー多様な身体表現・コミュニケーション・SDGs教育(ESD)ー

提題者(登壇順)

八木ありさ(日本女子体育大学)

大橋さつき(和光大学)

山崎 朱音(横浜国立大学)

堤 康彦(NPO法人 芸術家と子どもたち)

司会・進行

猪崎 弥生(放送大学、舞踊学会会長)

11月20日(日) 13:30~16:00 聖心女子大学 3号館1階 宮代ホール

【猪崎】本日のシンポジウムは学会のテーマを受けておりました、さらに昨日の基調講演と鼎談から導き出された色々な思いを引き受けながら行っていきたくて思っております。

昨日の永田佳之先生のご講演はダンスの可能性に言及していただいたことによってわれわれは勇気付けられたり、励まされたりしたと思います。教育の中でメインストリームになっている教育学よりも、むしろ身体に関わるダンスの可能性がSDGsに対して大きな可能性を秘めているとお話ししていただきました。

今日のシンポジウムは、未来につないでいくダンス教育の在り方についてですが、ダンス教育を学校で展開されたダンス教育にとどまらないで幼児から高齢者に至る人間の生涯を視野に入れた社会でも多様なダンス教育を含む広い意味で捉えていることとなります。

これまでのダンス教育は、学校の内外とか体育か芸術かという2つの境界をめぐる問題を抱えていましたが、最近では子どもを取り囲む社会環境が急速に変化する状況にあって、これらの境界を越える往来と拡張の新たな取り組みが始まっていると考えられます。

そこで今日のシンポジウムはそのテーマにふさわしい4名の登壇者をお招きすることができました。様々な立場での実践と研究の具体的な姿と、様々な切り口から本日のシンポジウムのテーマに迫っていただき、ダンス教育の現実を問い掛け、未来への可能性を考え、未来への姿を描いていきたいと思っております。

本日はどうぞよろしくお願いたします。

ダンスが行われる場の多様性を見つめる

八木ありさ

1. ダンスの性質と考えられて来たこと

ダンスの起源について考えるとき、大きく分けて2つの道があるのかなと思います。

原始の頃に人類は、生きていくために必要な自然現象の解釈や、超絶的な力に対して交信を試みるようなことを始めていきます。そうした例の一つとして、人々がライオンやシカなど、ある優れた特徴を持った動物や神・精霊などに変身して、それらが持つ力を自分の体に引き込みたいと考えた。模倣対象となる運動イメージと、運動の中で起こる精神状態の変化とを結び付けて、ある種の呪術的效果を期待していく。このようなことが儀礼へと発展していったことは、皆さんもよくご存じだと思います。こうした営みの形跡が、遺物、遺跡や伝統舞踊の中に残っていることも多いです。

一方、何だか気持ちが高揚して体が動いてしまった、というようにして生まれてきたダンスもあるはずですが、こちらは史跡などに残りにくい性質を持っており、初期の姿を確認しにくい。しかし、例えば(スクリーンに写っている)紛争地で素敵な瞬間を切り取ってくださっている長倉海洋さんの写真のように、命の危険のある厳しい環境でもふとした瞬間に子どもたちは踊っている。これは、運動の快感を繰り返し味わいたいから、そのこと自体が楽しいから踊るという自己目的的活動、遊戯活動の性質を持ったダンスであり、それはとても自然なことのようです。自然に発生したであろう遊戯的ダンスが、先ほどの祭儀的な性質

のものよりも前からあったダンスの姿なのかもしれない、という推論もご納得いただけると思います。

2. 語の由来から見るダンスの性質

次にそんなダンスの性質を人々はどんなふうに見てきたのかを、人々がそれを呼んできた名称の面から捉えてみましょう。

日本語の「舞踊」という言葉は、古い時代から用いられているようなイメージがありますが、ご存知の通り、実は明治の頃から使われ始めた言葉です。「舞う」と「踊る」という言葉が合わさっており、いずれも動きの特徴を表していると考えられています。

「舞う」は旋回、あるいは回転からくる刺激や快感を表し、「踊る」が主に上下方向の動きから来る刺激のことで、時には激しい繰り返しの末、意識を失うほどのこともあったでしょう。こういった動きの性質はシャーマニズムとも関わりがあるとされます。

この他に、舞踊を構成する動きやその動き方を決定する行為を「振り付け」と呼ぶことがあります。意識が遠のいている者を揺り起こすこととか、あるいは体を激しく揺すって深いところからエネルギーを湧き出させるような動きと関連がある。また、振り付けは模倣を主体とした行為であると考えられることもあります。何かの振りをする役者は、神様の前で役を演じてその身振りをする。そして神様を楽しませたり落ち着かせたりしていたわけです。

次に外国語の例を見てみましょう。英語を中心として用いられているdanceは、元々震える、振動するという意味だそうです。古英語のsealtian、ラテン語のsaltare, saltoは、生まれ出る感じで跳躍するさまや空中に跳び上がって体を回転させるような動きなのだそうです。ラテン語のballareとギリシャ語balliseinは共に、喜ばしい時に跳び回る、踊り回ること。古代ギリシャでは体を投げ出すようにして旋回する動きを見つけてダンスとして扱い、ダンスでは高い身体能力を必要とするという認識が育っていったんだと想像されます。中国の表現で、「舞踊のできないものに武器を持たせるな」というのがありますが、こちらも身体能力の高さ、体力とコーディネーション能力の高さをイメージしています。

こんな言葉の観察から、私たちが捉えようとしているダンス、舞踊という現象には文化や歴史によって異なる呼び名があるものの、振る、揺する動き、そして飛んだり踏んだりする動き、回る動きという大きな3つのタイプの運動の性質を持っていることと、喜びで高揚する様子や高度な身体技術を駆使している様子と深く関わっていることが推察されます。

純然と遊戯的な性質から身体能力や技術を磨くところまで眺められる、いくつかの例を動画で見てください。ここまで話題になっていた運動要素である、踏む、回る、揺るといった動きは、様々な文化で基本の動きとして踊られていて、その組み合わせなどを楽しんでいる、あるいはそこに意味を持たせているようだ、ということが読み取れました。

3. ダンスの多様な目的

さてここで人々がダンスをしてきた目的を簡単に振り返ってみると、今見てきたような「遊戯」「祭儀」がまずあったのかもしれない。そしてこれらのコンセプトをさらにブラッシュアップしたり、変革したりしていきいたいという「審美」性へ向かう心の動きが生まれる。また、共に行うこと、「交流」をコミュニティ作りにも活用し、集団を管理するようなことさえ可能となっていた部分もあったんじゃないか。そんな、大きく4つの目的が考えられます。

交流について、最近の例を見てみます。コロナ禍の最中でさえネットを通じて空間を超えてダンスを共有しよう、鑑賞するだけではなく共に踊ろうという動きが見られます。今見えているのは、郡上踊りを一緒に踊る人が欲しいからオンラインで配信するので一緒にやりませんかというイベントの画面です。

また、オリンピック、パラリンピックの機会には文化交流プログラムが盛んに行われますが、開会式や閉会式でメッセージ性のあるダンスが鑑賞の対象として展開されるという以外に、ダンスを共に行うこともあります。例えば、ご覧いただくのは、ウガンダと日本のホスト都市の交流を促進して、その取り組みを発信するために作られた動画です。場所、あるいは文化を超えるために、お互いに持っている特徴的な動きを学び合って、それを集めたダンスにして共有をして、映像を通じて交流、学び合ってきた様子が分かります。盆踊り的な動きとウガンダの民族舞踊的な動きをうまくミックスしたものを作って、お互いに覚えて、お互いに動画を送り合っていたいことをしたそうです。

このダンスの部分を制作したり、音楽を制作したりしたプロジェクトでは、私どもの大学で舞踊を専攻した卒業生たちが貢献していて、内心、自慢です。

先ほどの目的の種類に戻しましょう。こうした中で、ダンスを通して得られることをさらに何かに役立てる、人間の教育に役立てるということが起こってきます。

教育というのは、価値を伝え学ぶ活動だとした時に、ここで伝えられる価値には何があるでしょ

う。神の物語や民族の歴史をより身近に実感してもらうことだったり、仕事の手順や集団行動などのトレーニングになっていたり、暦とセットで行われることで自然との付き合いを学ばせてくれたり、という例が考えられます。そしてダンスの中で人の多様性に触れ、そこから得られる何ものかを活かしていく、という方向性のもについては、この後の登壇者の先生方がお話しくださるわけですね。

ダンスによる多様性の経験という考え方は新しいようで、実は50年以上も前から伝えようとしている人たちはいました。1969年に東京で開催された国際女子体育会議の大会で、故・松本千代栄先生が、ダンス教育について発表なさった基調講演のスライドを1枚だけお借りしてきました。「教育的芸術経験（としてのダンス）」が、「全ての人間のいきいきした感情の表出」や「人間相互の理解と融合を深める」という役割を果たす、とされたものです。

さらにはこんな風に（ラバンが中央に立ち、群舞を指導している写真を見ながら）、ダンスの中で大変よく感じとられる心と体のつながりを、集団の質の向上に意図的に利用する、ということも可能なわけで、古代社会では、シャーマンとしてこれを得意とする人々が為政者や集団を教え導く立場であった例も多くあります。

一方で、当然ですが、これが危険な意味を持つことも大いにありうる（社会主義国での軍事パレードの写真やヒトラーがスタジアムで講演している写真を見ながら）。

4. さらに多様な踊る理由

さて、他にも当然、踊る理由はたくさんあります。健康の維持増進回復ということもありますし、年齢を超えて、障がいの有無を超えて、病を得てもダンスを通じて引き出される心と体の健康がある。そんな辺りをもうちょっと見ていこうと思います。

高齢者を対象としたダンスや、認知症などある種の疾病の特徴を捉えて、なおかつダンスを楽しんでもらうという取り組みが本当に増えてきました。画面で紹介しているのはパーキンソン病の例ですけれども、それに限らず、がん患者でダンスを通してがんが小さくなる例があるという研究発表もあつたりします。

ここは多様性というくりにしたいですが、ご覧いただいている写真は、上は世界中に活動を展開しているCan Do Co. Dance Company。日本でも創立メンバーのアダム・ベンジャミンから、大きな影響を受けた人たちが多くいて、コミュニティダンスやインクルーシヴダンス、あるいは取って名前はつけない自分たちのダンス、を展開しています。左はAMICIと言ってヴォルフガング・

シュタンゲさんというドイツ出身の方がイギリスで立ち上げたインクルーシヴダンスの嚆矢と言ってもいいような活動です。

もう一息、マクロな視点で眺めてみます。社会の仕組みから取り残されたり隔離されたりして孤立している人々にもダンスが力を発揮する。社会から孤立してしまったらせっかく持っているエネルギーや力を発見、発揮できない。場合によってはネガティブスパイラルに入って後退してってしまうような、自分や他者を傷付けてってしまうような状況で、ダンスが意味を持つかもしれないということです。

これはフィリピンの刑務所の例です。刑務所の処遇が大変悪い中で刑期を終えて社会に出ても再犯率がかなり高いそうです。社会と切り離された刑務所の中で何年も過ごすうちに、信頼関係の作り方も忘れてしまう。そんな中、フィリピン、セブ島の刑務所で比較的重い犯罪歴のある人たちのグループでダンスを取り入れたところ、強制的な体操などには目もくれないような受刑者もダンスには進んで参加するようになっていった。身体的な健康状態が改善する傾向があったほか、受刑者たちはグループ行動に慣れて、その意味も理解できて、外部からの見学者も増えてきていることに勇気付けられてかなり社会性を高めている。この動画で10年前と比較して見ても表情などもずいぶん違うんじゃないでしょうか。

次に、路上生活で孤立を深めている人たちの例もあります。ソケリッサという路上生活の方たちのダンスグループをリードしているアオキ裕キさんがなさっている活動の一端が『ダンシングホームレス』という映画になっています。登場する人たちの言葉の重みがすごくてずっと観てしまえますけれども、ダンスの中で経験されることの切実感というのが強く感じられます。

社会の回復にダンスの力が大きく役立つことについて、他にも色々な例が挙げられると思うんですけれども、例えば、国を持たずに、しかし民族としての独自性を確認しながら生きているこのクルド族の人々が集まって踊っている様子です。日本にもコミュニティーがあって、日本で生まれ育った世代がもう立派な青年になっている。そしてそこでは、アイデンティティと結びついたこの踊りが見られるんですね。

北米のネイティブ・アメリカンの人たちが文化的に抑圧されてアイデンティティを失うことへの歯止めとして、POW WOWというイベントを定期的に行っているのも良い例と言えます。ここでは本来であれば敵対していたような部族も集まってダンスで競う。あるいは色々な種類のダンスがあることを確認しあって、自分たちの部族のダンスを見せ合って、高め合うというようなことをし

ています。またソビエト連邦があった頃に生まれたラトビアの祭典の例もあります。意志に反して連邦に併呑されてしまった後も独自の文化や精神を保つため、4年に1度全国から何万人もが集まって歌って踊る。マスで踊り歌う時に「自分たちらしさ」の感覚が強まる様子がよく感じられます。

5. 多様性を引き込むダンスらしさ

見てきたようにダンスが持つ大事な特徴は山ほどあるわけですが、2つぐらいにまとめると、ルールや道具に縛られずに、参加者や、その場に依じたかたちに変化させることができるという点と、言葉を超えて感じ取られるその人丸ごとがクローズアップされることで、自然な表現や非言語交流が実現できるという点となります。

型のあるダンスというのもあるから、そこはルールに縛られるんじゃないかと思われるかもしれないけれど、それを、時と場合や目的に応じて柔軟に変更できる訳ですよ。

いろいろなお話をしてきましたが、踊る人それぞれがその意味を感じて踊っているわけだから、外からこっちのほうがいいよ、正しいよというようなことは言わなくてもよい、その人にとっての意味を尊重することを通じての幸せがあるのではないかなと思えてきています。そんなふうシンポジウムの扉を開けて、私の担当部分を終わりにしたいと思います。

障がい児のウェルビーイングと身体表現遊び

大橋さつき

1. 子どものウェルビーイングとムーブメント教育・療法

私の活動の基盤となるのは、運動遊びを原点とした発達支援法である「ムーブメント教育・療法」で、これに身体表現の要素を強化して障がい児支援や子育て支援の場で活用してきました。ムーブメント教育・療法では参加者の主体性を重視して、「〇〇したい」を引き出すアプローチが基本になります。人間の発達を統合的に捉えて、「からだ・あたま・こころ」の広がりを常に考慮して「動くことそのものを学ぶこと」と「動きを通して学ぶこと」の両方から子どもの全体的発達を支えています。

一方、「ウェルビーイング」は本大会のテーマであるSDGsの提言やコロナ禍の変化で注目を集めている言葉です。ウェルビーイングは幸福、健康、福祉などの意味に解釈され、WHOの健康の

定義では「満たされた状態」と訳されています。SDGsで掲げられた17の目標の1つにも「Good Health and Well-Being」という目標があり、これを受け、日本政府は成長戦略として国民がウェルビーイングを実感できる社会の実現という言葉で明記しました。OECDの提言でも教育の未来に向けた枠組みがラーニング・コンパスとして示され、教育の最終目標は個人、社会、地球環境のウェルビーイングと定義されました。日本の教育分野でも、ウェルビーイングは、いよいよ重要なテーマとなってきました。日本政府の提言には、目指すべき教育の核として、「子どものウェルビーイング」の実現が掲げられるようになりました。

しかし私がこのウェルビーイングに注目したのは最近のことではありません。実はムーブメント教育・療法を体系化したM. フロスティック博士が1970年に出版した本に、ムーブメント教育・療法の中心的な目標は「生命および人間の尊厳を前提とした健康と幸福感の達成」であると書かれているのです。私は20年以上実践に取り組んでいますが、フロスティックが唱えた「健康と幸福感の達成」について、今もまだ問い続けています。WHOの健康の定義やQOLの考え方に照らし、少なくとも参加者が快く楽しいと感じ、笑顔や拍手が多くなっていけば目標に近づいているだろうと信じつつ実践を続けてきました。

本発表では教育の中心にウェルビーイングを位置づけることが求められている今、改めて「健康と幸福感の達成」を掲げて取り組んできた自身の実践を振り返り、皆さんと共に子どものウェルビーイングを大切に生きる未来への足がかりを得たいと思います。

2. 遊びの場の共創ーウェルビーイングの醸成ー

①「環境」の力を最大限に活かす

ムーブメント教育・療法では、子どもが主体的に動きたくする環境づくりを目指します。目の前に風船が出てくればつい手を伸ばしたくなるように、遊具や音楽を活用して子どもと環境との対話によって生まれる動きを重視します。

WHOでは2001年に、ICF（国際生活機能分類）を採択し、「障害」の捉え方を改めました。それ以前は、機能障害があると能力障害を引き起こし、何らかのハンディキャップをもたらすという一方的な関係でマイナス面を分類した上で、能力を改善するためには治療や訓練が必要だという捉え方でした。これに対して、ICFでは、個人の「心身機能・構造」レベルだけで障害や健康状態を判断するのではなく、「活動」レベルや「参加」レベルを独立させて、その上で、「個人」と「環境」の相互関係でプラス面を重視して全体を捉えます。個性を尊重しながら人間を包括的に考え、「生き

ることの全体像」をとらえようとする動きや個人と環境の関係性から、「○○があれば、△△ができる」という視点、「マイナスを減らすことよりも、プラスを増やす」という視点から支援の方向性を探ろうとする取り組みが増えてきました。ムーブメント教育・療法では、このような動きを先取りして実践していたと考えられます。

例えば、感覚過敏などで手を握るのが苦手なお子さんがある場合、手をつないで輪になって皆で一緒に踊ることはできないでしょうか。環境の工夫の一例として、写真のように各自がフープを持ってつながる方法はどうでしょうか。感覚過敏の子どもの他に身長差があっても皆が楽な姿勢でつながるような展開が可能になります。遊具や音楽以外でもテーマやストーリーも環境要因と考えています。この写真は「冬眠中のクマさんを起こさないように移動しよう」という設定を皆で共有した場面です。多動傾向のある子どもたちも静かに移動することができました。

学生たちと一緒に取り組むようになってから特にストーリーやテーマをより多く設定するようになり、参加者全員で場を創る面白さを追求してきました。元々ダンスや舞台に興味を持った学生たちが私の周りに多かったことも影響して、学生たちが創るプログラムがより創造的でドラマ性のあるものに発展していきました。そして、「本気で遊ぶ」学生たちの存在そのものが子どもたちにとってより魅力的な環境になっていきました。

動画で紹介したプログラムの実践例に現われているように、障害の改善・軽減や能力向上のための訓練的な介入ではなく、集団遊びの中で強みを生かして環境をデザインし関係性をアレンジするという考え方が根底にあります。課題を一方的に与えるのではなく、機会として提供し、子どもが主体的に参加し、お互いに関与しながら共に遊びの場を創ることで成立するアプローチを取っています。

②母親の幸福感に着目して

私は、学生たちのおかげで、最も魅力的な遊び環境は「人」であるということを確認しました。その後、自分自身も母親になった経験が大きかったと思いますが、子どもの育ちに影響を与える環境として、母親の幸福感についてより深く考えるようになりました。日本の実情から「子育て支援・障がい児支援＝母親支援」であると考えられます。実践に参加する母親たちが元気になっていくことを実感していましたが、改めて記録を元に「どんな時にママは幸せな気持ちになっていたのか」について調べてみました。その結果、次のA～Fの分類が見えてきました。

Aは「自分自身のリラックス・心身の解放」で

す。ゆっくりした音楽で行うダンスやストレッチの活動では母親たちも気持ちがほぐれた、リラックスできたという感想と共に幸せな気持ちが残されることがあります。また、リラックスというよりは遊びの中で自分自身を解放する体験も幸せな気持ちに関係しているようでした。

Bは「我が子や他者との交流活動の分かち合い」です。発達障がい児のお母さんの場合、特に我が子との情動的な交流をうまく体験できないケースがあります。動画のダンスのように、「お母さんの鼻はどこかな、お口はどこかな」と身体部位を確認してタッチしながら一緒に揺れているだけの活動でも、このお母さんは本当に嬉しかったという感想を書かれていました。

次はCより先にDを紹介します。Dは「我が子が何かができるようになったり成長を感じる変化を見せたりした時」の喜びです。この動画は、それまで集団活動に入れずにいた自閉スペクトラム症の男の子が変化を見せてくれた日の記録です。お返事ができたり、パラシュートにも初めて乗ることができたりしたのでお母さんもお父さんも周りの人たちも皆で喜んでいました。

Cに戻ります。私はこのカテゴリーが一番大事だと思っているのですが、Dとは違って、子どもは変わらないのに母親の受け止め方が変わって、嬉しいと感じているのです。例えば、この動画は、「フープの中に左手を入れて」という身体部位の確認をするプログラムで、他の人たちは、床に置いたフープの中にしゃがんで左手を入れているリーダーのお手本を真似しているのと同じ動きです。けれど、ある男の子が立ち上がって伸ばした左手にフープをかけました。ここで、「すごい！違うやり方だけど、フープの中に左手が入っているね！いいね！」と肯定的な反応があったことに、母親は驚きと喜びを表しています。

これはボルダリングの壁を利用した「ボルダリングペったん」と題した活動の記録で赤青黄の色を識別する課題が含まれています。この時の、この男子の手の動きは自閉スペクトラム症特有の「クレーン」と呼ばれるもので数ヶ月前に診断を受け、母親は我が子が自分の手を取ってクレーンをやるたびに悲しくなると話していました。ところがこの時、「色が全部分かっていて嬉しかった」と書いていまして、確認したら映像でも笑顔でした。確かにクレーンなのですが、母親自身の肯定的な受容が増えることで幸せな気持ちも増えていったのです。

次は、Eは「我が子を受容する場への感謝」です。この動画は、「花」をテーマにしたクリエイティブなプログラムの記録ですが、元々は学生たちが開花のイメージで踊ってみせて、子どもたちは座って鑑賞してもらう予定でした。しかし、あ

る女の子がすっとリーダーの学生のところに歩み寄って「私の花も混ぜて」と、花に見立てたスカーフをくっつけるようにしてきたんです。引き寄せられるように何人か他の子どもも出てきて、学生たちもうまく適応して、即興的な花を咲かせる表現が生まれました。この女の子はADHDの傾向が強く学校では否定されてばかりで苦しんでいたようで、この子の母親は我が子の主張をうまく受け入れてもらえて、場が展開したことに感動した、嬉しかったとコメントを残しています。

最後にFは、「他者の喜びに対する共感や場全体への満足」です。例えば、Dで紹介した男の子がパラシュートに初めて乗った場面で、一緒に喜んだ他児の母親たちの感想がこのカテゴリーにあたります。

また、全体の活動の充実や場の盛り上がりを楽しむ時は、主語が「私が」とか「私の子どもが」ではなく、「私たち」になるのが特徴です。「私たちは、今日はすごく楽しく活動できて嬉しかった」といった感想が残っています。さらに継続して活動に参加しているうちに、全体に貢献しようとする動きを見せる母親も出てきて、そうすると、「私の子」ではなく、「私たちの子」という視点からのコメントが増え、Fのカテゴリーが多くなっていくようです。

③共生・共創を目指した舞台づくりの実践から

残念ながら現在はコロナ禍の影響で活動が継続できていませんが、コロナ前までは大学と地域の連携が進む中で私たちの活動により多様な人たちが集まるようになり、生活圏を共有する人たちで子育てを共有する意識が芽生えていました。共に遊びの場を創る実践の中で、「支援する側・される側」という関係を超え、育み合う場に発展していったと思います。ここでは、大学と地域の継続的な連携において実現した取り組みを紹介します。

「心音（こころね）プロジェクト」は、2016-2017年度和光大学地域連携研究センター主催の社会連携研究プロジェクト「共生・共創をめざした創造的身体表現遊びの実践—地域と大学の連携による子育て支援・障がい児支援の取り組みを土台に—」の通称です。和光大学の学生・卒業生と地域の子どもたちや大人たちが、ダンスやアート、太鼓などの表現あそびのワークショップを楽しみ、それらを活かして舞台発表という新しい「場」を生み出すことを目的として実施されました。舞台活動という課題を通して、地域と大学の連携により実現する創造的な身体表現遊びの場が、いかに「共に生きる場を共に創る」体験を促進することができるのか、また、その場の体験が、一人ひとりの変容にどのように関係するのかについて検討することをねらって活動を開始しました。地域か

ら、障害や年齢（0歳児を含む親子から60代女性まで）、経験に様々な違いのある人たちが集まりました。

発表会本番は、2017年3月に神奈川県内のホールにて、約30分の舞台パフォーマンスを上演しました。本プロジェクトの特徴は舞台上演を最終的な目標としながらも、その実現のための手法として極力、練習や稽古といった活動を避けたことにあります。あくまで遊び活動として積み上げてきた営みを土台に即興的な表現を重視し、自然なかたちで各々が舞台上で表現できるように工夫しました。この「遊んでつくる、舞台でも遊ぶ」をモットーにした展開については、参加者の多くが「舞台本番までの全ての過程を最後まで楽しむことができました」「舞台上でも遊んだ」と述べていました。観客のアンケートでも「出演者の遊び心溢れる偽りのない表現に心打たれた」などの好意的な感想が寄せられおり、十分な手応えがありました。

実際の発表本番の映像をご覧ください。これは、チンドン屋さんの遊びから生まれた登場のシーンです。楽器を自分たちでつくって音遊びを楽しむところから始めました。客席の後ろから通路を通して音を鳴らしながら練り歩いて舞台上上がってぐるぐる回って横一列になって口上を述べました。

穴が空いている長い布でできたオリジナル遊具を用いたシーンでは、草木の芽生えを表現しました。特に決まった振付ではなく、布を持っている学生たちには少しだけ段取りがありますが、あとは皆自由に穴に手を突っ込んだり頭を出したりしています。

これはムーブメント遊具のパラシュートを応用してビニールで作成したものをを用いた場面です。やさしく揺れるパラシュートの下に集まって、包まれています。自分の身体の縁取りをしたシルエットがセロファンなどで彩られてあるので、子どもたちは下から自分のシルエットを見つけて喜んでいきます。劇場の照明が強く当たってきれいだったので、出演者が舞台上で「わ～」と声を上げ、観客にもその想いが伝わったようでした。

「光で遊ぶ」活動から生まれたシーンでは、照明担当者も出演者の動きを見ながら即興で操作しています。最初は光と鬼ごっこをして、光から逃げています。次に音楽が聴こえてきたら逆に光の中に入るというルールで遊ぶシーンに続きます。「光の中で全員の顔がお客さんから見えるといいね」という目標は共有していましたが、あとは何も決めないままでした。それでも本番は、出演者たちは即興で様々な姿勢をとり、互いに関係しながら、群像としてのポーズで魅せてくれました。

太鼓の得意な学生がいて太鼓のワークもやったので、太鼓を活かしたシーンも生まれました。光

にプラス太鼓で、光が当たったところにいる人たちがたたくという簡単なルールで展開しました。これに赤青黄色の色のイメージも追加して楽しみました。

最後のシーンは「波」をイメージして、太鼓の音に合わせて走り出て跳ぶ、戻ってまた跳ぶという単純な動きの繰り返しだけの表現です。ラストは、ぐるぐると渦になって走り、海のイメージで、舞台正面に大きくジャンプをして終わりました。大人も子どもも学生たちも一体化して生き生きと波になって動いていました。

3. 「私たちのウェルビーイング」を共に創る縮図的な体験として

ウェルビーイングは個人の短期的な状況や感情の状態のとどまらず、より包括的で個人を取り巻く集団コミュニティ、社会が継続的により良い状態であることを言います。つまり個人のウェルビーイングの向上は、場のウェルビーイングの醸成でもありと考えられます。

そのような視点から改めて自身の活動を振り返ると障がい児の一人ひとりのウェルビーイングを大切に活動してきたことが当然ながら周りの遊び環境の力を重視する展開になっていて、結果として「私たちのウェルビーイング」を醸成するということまで見えてきたかな、その「私たち」というのは家族や地域コミュニティまでは確実に言えるかなというふうに思っています。小さい活動ですけど、発信し続けることで少しは社会のウェルビーイングにもつながるかもしれないと考えていたところです。

昨日、永田先生の基調講演でお話いただいた蚊取り線香の図の「？」のところは何が入るのかということについて考えてみたのですが、私たちの活動をずっと楽しんで続けていたら、今すぐではなくても、この小さな営みがいつかは地球規模とか全人類のウェルビーイングにつながるところまで考えてもいいのかなと思いはじめました。障がい児を含んだ多様な人たちが共に遊び、踊り、共に生きる場をつくる本実践は非日常の想像の世界ではありますが、同時に「私たちのウェルビーイング」という個の集積的な総体のウェルビーイングを想定して、私たちのための幸せな場（未来）を共に創る縮図的な体験とも言えるだろうと思います。

ESDから学校におけるダンスの可能性を探る

山崎 朱音

1. はじめに

現行の学習指導要領には、「持続可能な開発のための教育（ESD）」が基盤となる理念として掲げられています。指導要領の前文及び総則には「1人1人の生徒（児童）が自分の良さや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすること」が示され、この「持続可能な社会の創り手」を学校教育を通して育成することが求められています。

この「持続可能な社会の創り手」を期待される子どもたちの「生きる力」を育むことを目指すにあたって、全ての教科に共通して3つの資質・能力を育むように目標が設定されました。

一つ目に、実際の社会の中で生きて働く「知識及び技能」。受験勉強に必要な知識ではなく、本当に実際の社会で使える知識であり、「知識を詰め込む」こととは異なる「知識」といえます。そして世の中はこれからどうなっていくか分からない。そういう時代を生きていく子どもたちが未知の状況にも対応できるような「思考力・判断力・表現力等」。そして学んだことを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」。この3つの柱が、全ての教科を通して育む資質・能力です。

そして、学習の効果の最大化を図るカリキュラムマネジメントに努めること、また、社会との連携及び教育によりその実現を図るために「社会に開かれた教育課程」の実現が目指されています。各教科が独立するのではなくて、教科等の連携、そして学校を超えた社会との連携が求められています。

ESDの視点に立った学習指導の目標は、教科等の学習活動を進める中で、「持続可能な社会づくりに関わる課題を見いだし、それらを解決するために必要な能力や態度を身に付ける」こととなります。持続可能な社会作りの構成概念は、「多様性」「相互性」「有限性」「公平性」「連携性」「責任性」の6つ、ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度は、「批判的に考える力」「未来像を予測して計画を立てる力」「多面的・総合的に考える力」「コミュニケーションを行う力」「他者と協力する力」「つながりを尊重する態度」「進んで参加する態度」の7つの視点に示されています。

ここで示されている6つの構成概念と7つの能

力・態度を、学習指導要領における資質・能力の3つの柱に対応した観点別学習状況の評価の3観点と関連付けて考えることは、学校教育の中でのESDの推進につながると考えます。持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質・価値観を養うためには、その根本となる「生きる力」と関連付けながら、教師は授業を計画・展開していくことが求められます。

2. 学校教育におけるダンス系領域の位置づけ

ダンス・表現運動(以下、ダンス系領域とする)は、体育科・保健体育科の教科の中で取り扱われています。小学校から高校までの12年間のうち、中学校1,2年生までの8年間は必修で行われています。ただ、現場の先生方の話を聞く限り、特に小学校において運動会で行うダンスが表現運動の授業とされており、ダンス系領域の特性に触れることができる授業が行われていないことが危惧されます。

ダンス系領域の特性は、中学校学習指導要領には、「ダンスは、『創作ダンス』『フォークダンス』『現代的なリズムのダンス』で構成され、イメージを捉えた表現や踊りを通じた交流を通して仲間とのコミュニケーションを豊かにすることを重視する運動で、仲間と共に感情を込めて踊ったり、イメージを捉えて自己を表現したりすることに楽しさや喜びを味わうことのできる運動」と示されています。世代や人種、障害の有無などを超え、勝敗や記録にこだわらない、身体を通じた他者とのコミュニケーションを豊かにする運動と捉えることができます。

そして、ダンス系領域の学びの特徴は「探求型、ゴールフリーの学び」であることです。つまりひとつの正解・ゴールを求めるのではなく、個に応じたそれぞれの表現があることを認めるよう、教師は授業を展開していくことが、ダンス系領域の特徴であり、ここに体育・保健体育の他の種目とは大きくダンス系領域が異なる運動の特性です。

そのために、指導方法も他の種目とも大きく異なるところがあります。例えば、自由な表現を引き出すために、教師自身も威圧的な態度を取ったり、型にどんどんとはめ込んでいくような指導は、自由な表現を引き出すためには適していないと思われます。教師の指導性としても、賞賛などの肯定的な言葉がけを積極的に行ったり、普段は集団に埋もれてしまう子どもの動きを価値付けてクラスの中で共有していくなど、学習環境の設定も重要な教師の役割だといえます。

取り扱う3つのそれぞれのダンスの特性についてです。「表現・創作ダンス」はイメージを起点にして自由に表現する。「リズムダンス・現代的なリズムのダンス」はリズムに乗って自由に踊る。

そして「フォークダンス」は伝承されたものを身に付けて一緒に踊って交流することが特性です。「表現・創作ダンス」と「リズムダンス・現代的なリズム」については、特に自由に踊る創造的なダンスということで、「フォークダンス」とは異なる指導の仕方が提案できます。

特に今回、「表現・創作ダンス」についてお話しをさせていただきますと、表現・創作ダンスの主な技能としては、即興的な表現(ひと流れの動き)とひとまとまりの表現(作品創作)があります。授業の中で子どもたちが自由に踊ることができると、そこには、正解が1つではない多様な表現が生まれます。このような子どもの動きに対して、教師は即興的な指導を求められ、子どもの動きに対応した臨機応変で柔軟性のある指導が必要といえます。

昨日、永田先生が教師の身体性について、これから必要な教師の身体性は、「正答のない問いを大切にしている先生」、「等身大の先生。柔軟性で受容的な身体性、傾聴の姿勢がある先生」。そして「変容する先生(トランスフォーム)」を挙げられました。

このような今求められている教師の身体性は、これまでのダンス授業の指導場面で必要な教師の姿と重複しているように思います。

3. 体育授業の転換とダンスの価値の再考

少しダンス系領域と併せて体育授業についてもお話をさせていただきたいと思います。ESDの観点が入り3つの資質・能力の育成に学力観が変化している今、体育・保健体育の授業も変化してきました。例えば、「何かができるようになる」「相手チームに勝つ」ことを重視した指導は改められ、例えば「どういった練習方法が考えられるか」「○○さんのこういう動きが良かったね」といった、自身や他者の身体に向き合う、仲間と協働して練習方法や作戦を考える授業が行われ、正解の獲得ではなく、問題の解決に向け思考する力を育む授業が行われています。ここで育成される資質・能力が、「思考力、判断力、表現力等」、そして「学びに向かう力・人間性等」であり、この資質・能力が重視されています。つまり、今の体育・保健体育授業では、勝敗や、記録だけでは子どもを評価しません。

今の体育・保健体育授業に参加する子どもは、運動の好き嫌い、できる・できないの技能差だけに限らず、外国にルーツがある子ども、なにかしらの特徴をもつ子ども、ジェンダーでジレンマを抱えている子ども。このように、多様な子どもが同じクラスの中に存在しています。やはりここでも「多様性」がキーワードになるかと思います。多様な他者同士が、互恵的に学び合うことが体育

授業に求められているのです。自分ができるようになるとか、勝つために自分がシュートすればいいという利己的な考え方ではなく、みんなで一緒にやるにはどうしたらいいのか、自分が少し我慢することがあったとしてもみんなが楽しめるという、利他的な考え方ができる子どもを、体育・保健体育の授業を通して育てていきたいものです。

横浜国立大学附属鎌倉小・中学校の授業で、中学校3年生と小学校2年生が一緒に行った体づくり運動の授業です。「あなたもわたしもあの子もその子もたのしめるうんどうづくり」という授業目標で、体格差も技能差もある、けれども全員が楽しめる運動を中学校3年生が考え、小学校2年生と授業をしました。中学校3年生はこの単元に入る前に、誰もが楽しめるスポーツとして「ゆるスポーツ」を調べ、体験しています。その学びを生かし自分も小学生もみんなで楽しめる運動を考えるという授業が展開されました。

＜動画開始：ローラーバスケの実践＞

小学校2年生が椅子に座った状態でそれを中学校3年生が動かすというバスケットボールです。中学校3年生が考えた運動について、小学生からも意見を聞き、みんなが楽しめる運動は何だろうとみんなで考えていました。このような授業が昨今、ダンス系領域に限らない他種目の授業でも考えられています。

ダンス系領域の特性は、他の運動領域とは異なる要素を持っています。先に述べた「探求型・ゴールフリーな学び」がそのひとつです。イメージを即興的に身体で表現する力、仲間と共に試行錯誤して作品を創作する力は、まさに「何ができるか」に留まるものではありません。個別に捉えたイメージを身体を媒体として表現し、仲間との違いを認め合い高め合う活動をするのは、今日の教育課題である「個別最適な学び」に対応した学びといえます。この学びが例え教師が意図せずとも、ダンス系領域の特性の中に含まれていること自体に、ダンス系領域の可能性があるのでないでしょうか。これまででも、ダンス系領域は、他の運動領域よりも先行した学びを提案してきたのではないかと考えます。

改めてESDの視点に戻ると、ダンス系領域授業の中で育成される「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」は、未知の状況に対応し、その学びやその後の人生の学びや人生の「生きる力」となり得るのではないのでしょうか。ここに、ダンス系領域が持続可能な社会の創り手を育成する要素を多分に含んでいると考えます。

4. 教科連携による学びの拡がり

ダンス教育のみをみても、子どもの多様性に対応しながら個の学びを促すことはできます。ただ、

「身体表現」からのアプローチだけでは「自分を表現すること」ができないという子どもがいることは想像できます。多様な表現活動を通して、自分に合った表現方法を子どもも自身が見つけていくことも必要ではないでしょうか。

表現活動そのものは、音楽や身体、言葉、造形など様々な方法で行われます。未就学児はこのように多様なアプローチにより表現活動を楽しんでいます。学校教育になると、突然「教科」が出現します。表現活動を担う教科には、音楽や図画工作、国語、ダンス系領域を含む体育が該当します。ダンス、音楽、図画工作・美術に共通する表現活動は、自分が何をどのように表現したいのか、という「個」が尊重されます。さらに、人種や性別などにとらわれない、「人と違っていい、違うことが当たり前」という多様性の概念が存在します。特に現行の指導要領では、ESDを実践する上で学習効果の最大化を図る「カリキュラム・マネジメント（教科連携）」に努めることが記されています。このカリキュラム・マネジメント（教科連携）が推奨されている今、表現活動を共通項として図画工作・美術や音楽、体育が連携することは、個々の多様な表現方法の選択にもつながり、学びの深まり、拡がりを促すことができるのではないのでしょうか。

5. 横浜国立大学教育学部での取り組み

横浜国立大学では、教育学部が主体となって大学全体でのESD教育に取り組んでいます。その取り組みから派生し、学内にある「里山」を活用し、里山にたくさん生息している「竹」を素材とした授業を教育学部教員の様々な視点から担当する授業があります。そのうちの2コマ分を美術、音楽とダンスが協働して「里山を表現する」という授業を担当しました。

里山にある「竹」を切るところから活動は始まります。その後、手を加えながら楽器を製作します。その楽器を用いて音を奏で、その音に触発された身体表現を楽しむという活動でした。

この教科連携による取り組みは、一連の活動を通して、学生が何を感じていくのか、ESDの視点に立って検討しました。受講学生に対し授業後に、ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度の7項目について5段階で回答を求め、また活動を通して何を感じたのかを自由記述で調査しました。グラフで示しましたが、7つの項目のうち「批判的に考える力が身に付いた」以外の6つの項目について、学生は肯定的な評価をしています。自由記述からも、多様な方法による表現活動が受講学生のESDの視点に広がりを持たせることも確認されました。

6. 学校教育におけるダンスの可能性

学校におけるダンスの可能性が、ESDの視点が入ることで新たに着目されうるといえます。ダンスそのものの持つ特性、その特性を生かすための教師の姿、学習者同士が創る空間が、ESDの視点に立つことでより強調され重要視されるものとなったと考えます。

改めて、ダンスを「表現活動」「身体表現」と捉えることによる学校教育の中でのダンスの可能性はより一層広がっていくと思います。これまで様々な実践や研究が行われていたことが、今の学校教育が向かうべき方向性と合致し、ダンスの価値が一層認められつつあると思います。

学校教育の中で、ダンス系領域の素晴らしい特性を伝えていきながら、子どもの数十年後の資質・能力の育成に携わる内容を包括していることを再認識していきたい、またまだまだ秘めているダンス系領域の可能性を先生方と議論させていただきながら深めていけると幸いです。

様々なバックグラウンドを持つ子どもたちとアーティストとの出会い：ダンス・ワークショップの可能性

堤 康彦

団体概要ですが、1999年に創立しまして2001年にNPO法人化した団体でございます。主に都内で活動しておりまして、子どもワークショップを専門的にコーディネートしています。

活動目的は、多様な価値観、考え方、身体感覚を持つ人々が共生する社会を創造するため、子どもたちとアーティストの出会いを通じて創造的な学び、遊びの機会を作り、子どもたちの育ちに寄与することです。

2021年度の実績としては、ワークショップなどに参加した子どもの人数は4,600人余り。ワークショップの実施日数が延べ511日間の活動をしております。

芸術ジャンル、実はダンスだけではございません。ダンスのアーティストに行ってもらえることが多いですが、ダンス以外にも音楽、美術、演劇など、コンテンポラリー系の現代アーティストの人に色々なところに行ってもらっている団体です。

活動の中心になっているのがASIAS (Artist's Studio In A School) で、これは私のほうで勝手に名付けて総称して言っているものです。子どもたちが普段いる場所にアーティストが出掛けて行って、子どもたちの日常的な時間にワークショップを実践する活動です。ここに概念図を書

きました。アーティストと小中学校、幼稚園、保育園など子どもがいる場所、そこを橋渡しして、当NPOがコーディネーターをやっています。

団体にアーティストが所属しているわけではありません。そのたびごとに学校などからこんな体験を子どもたちにさせたいという希望を伺って、それに基づいてアーティストに声を掛けています。事前にまずコーディネーター（当NPOスタッフ）が学校などにお邪魔し、先生からヒアリングをして、いったん持ち帰り、その後アーティストを決めて、アーティストを連れて行って、もう一度打ち合わせをする。それからワークショップの実施というようなかたちでやっております。

その活動全体を支えていただいているのが国とか自治体とか教育委員会、民間の財団や企業などの協賛金など。あるいは個人のご支援もたくさん最近はいただいております。

ASIASは2000年に活動をスタートした時には、公立の小学校を対象にしていました。ただそこからアーティストを連れていく先が広がり、ASIASは頭文字、「Artist's Studio In A School」を略したもので、schoolと言っていますが、いまではschoolだけではなくてきています。子どものいる場所というのが、年齢的にも広がって幼稚園、保育園、子ども園など幼児のいるところから中学校、また学校の中でも通常級だけではなくて特別支援学級とか通級教室に行ったり、あるいは特別支援学校に行ったり、福祉施設である児童養護施設や、障がい児入所施設、母子生活支援施設、児童自立支援施設のような、まさに子どもたちが生活の場としているところにもアーティストを連れていくことをやっております。最近子ども食堂など、子どもの居場所のようなどころとか、養育家庭いわゆる里親の家庭のところとかファミリーホームとかの子どもを対象に活動したり、直近では少年院と打ち合わせをしています。

子どものいる場所、日常的に彼らがそこで生活しているところにアーティストが行くことに何か意味があるんじゃないかなと。子どもたちを公募で集めて、例えば、劇場でワークショップをやるとかそういうのもとても意義のある活動だと思うんですけど、そうではなく、子どもたちが日常的にいる場所にアーティストを連れて行くということ。そこにちょっと私は興味があって継続して進めています。

こちら小学校の特別支援学級に山田うんカンパニーのダンサー数人に行ってもらった実践ですけど、全部で10日ぐらい行きました。徹底的に音楽を流して自由に踊ることを繰り返し、即興的に踊ることをやっております。最後は通常級の子どもたちに作品、作品と言っても振り付けがあるようなものではないんですけど、曲と構成を決

めて見てもらいました。

これは都内の児童養護施設に新井英夫さんというアーティストに行ってもらった時の実践です。左上は『なべなべそこぬけ』、2人組でくると反転するような、それを最初は2人でやって、次に4人とかグループでやっているところです。職員の方も入ってもらったりしながらやっています。右上はステップたたきと新井さんは呼んでいますけれども、円になった周りの子どもたちが長座姿勢で、足に木の木片を乗っけています。中央の子どもが床に足をつけた瞬間に木片をマレットでたたき。中央で動く人がある意味音楽の指揮者の役割を体を動かしながらやっていくような感じですね。左下は障がい児の実践で、ポリエチレン幕などモノを使って動いています。右下は、光の軌跡といって、カメラに向けて懐中電灯で光を当てながら、シャッターをずっと30秒ぐらい押しっぱなしの状態にして光の軌跡を作るような実践になります。

入り口のところで『教育美術』という月刊誌に私が新井英夫さんによる実践について寄稿した「からだを奏でる子どもたち」の資料を配布しました。新井さんは色々なものも使ったり、音楽を生かしたり、空間を生かしたりということをよくやっているアーティストです。その方の実践を紹介したものですので、ご興味がある方がいらっしやれば見てください。

次も都内の児童養護施設で森下真樹さんというアーティストに行ってもらった時のものです。児童養護施設には2歳ぐらいから18歳ぐらいまでがいますが、ここは割と小学生の女子が多かったです。10日間ぐらい継続して通いまして、最後下の写真は施設の職員さんと、他の子どもたちに発表しているものです。

次に、子どもを取り巻く社会状況ということでお話ししたいと思います。社会もここ10年、20年変わってきていると思うんですが、大きなことはここ20年強、経済的に不況が続いているという日本の特有の状況があります。

子どもを取り巻く環境の変化では、自然の中で遊ぶ機会が減りすぐ疲れたと言っていたり、あるいはテレビ電話、インターネット、スマホに触れる時間が増加していたり、親や先生以外の他の大人とふれあう機会が減少している。異年齢の子どもとなかなか触れ合う機会がなかったり。自閉、発達障害傾向のような子どもが、顕在化してきていることもあります。1人親家庭、貧困家庭の子どもが増え、育児放棄を含む虐待を被る子どもが増加している。全体として自己肯定感が得られない子どもが増え、子ども個々に支援、対応、ケアの必要性が増大していると思っています。

アーティストを連れて行く先を拡大してきたことは、20年の間にどんな子どもたちの元へアー

ティストを派遣したらいいだろうというのをやりながら考えてきた結果でもあります。最初は公立の小中学校に行ったわけですが、その時も様々な子どもがいて、例えば、発達障害傾向の子だったり、外国ルーツの子もだったり、とても複雑な家庭環境の子もだったり、公立の小学校なので色々な子が通常級にもいることを感じました。特別支援学級とか特別支援学校を重点的に行くことになって、特に知的障害だとか情緒障害の子どもたちが在籍しているところに行ったりしています。

児童養護施設は色々な家庭の事情で保護者と暮らせない子どもたちが生活している場になります。大体1部屋7～8人で暮らしているようなところが多いですが、現在はほとんどの子どもたちには生存する親がいて、近年の最も顕著な入所理由は虐待となっています。

障がい児入所施設というのもここ10年ぐらいで歩き始めています。自宅で日常生活を送ることが困難な子どもが入所している場所になっています。

母子生活支援施設、これも入所する理由は様々ですが、例えばDV被害者の自立支援を進めるための施設でもあります。

児童自立支援施設は、今年度初めて神奈川県施設に行くんですけども、いわゆる不良行為をする恐れのある児童、あるいは家庭環境その他環境上の理由で生活指導を要する児童が入所しています。実際には家庭環境が非常に複雑な子どもたちが集まっています。

次に、アーティストワークショップの効用についてです。例えば、発達障害傾向の子どもたちの場合を考えてみますと、普段の生活ではこだわりの強さとか、他者との関係において、特に言葉によるやり取りにぎこちなさを感じていたり、他者の感じていることを慮ることが苦手だったり、感覚過敏だったり、注意欠陥だったり、多動だったり、行動特性としてその子その子で違いますが、大体日常生活を送る上でマイナス面としてそれらが現れてしまうことがあります。

そのことによって自己肯定感の低下とか孤立感とか、あるいはかっとなってしまったり、生きづらさを感じている。でもアーティストワークショップをやっている時は、アーティストは、そもそも人や人の心、人の感じ方はそれぞれ違いがあって多様であるという前提に立っていますので、彼らの行動特性を個性として捉えてアイデアだとか感受性を生かしてワークショップを進行していくことになります。

子どもたちの感じ方や行動の変化、子どもたちから出てきた表現をとにかくほめること。実際にアーティストが面白いと思ってほめることによって、子ども同士の関係性にもいい効果が与えられ

ることが多いです。

つまり子どもたちの自己肯定感の向上であるとか、他者とのコミュニケーションや関係づくりの質的向上が生まれていて、特に言語以外の音楽や身体表現による他者との即興的なやり取りとか、個々の違いを認め合いつつ共同で何かを見いだす喜びを味わうのは貴重な体験となっていると思っています。

次に、被虐待経験を持つ子どもたちの場合を考えますと、そういう子どもたちに見られがちな傾向としては、自尊感情が低かったり認められる体験が少なかったり、自己表現を抑圧してしまう、対人関係を作れない、虐待を受けてきているので、そもそも他者に対してマイナスイメージが強い。実際、生活の中で勉強するどころじゃなかったような環境であったりするので、低い学力であったり行動上の問題が起きたり、居場所を喪失していること。愛着障害などの障害も多くなっておりま

す。アーティストのワークショップでは、自由な表現が許されること。否定されることがなく自分の表現に対して肯定的な評価が得られること。定期的に用意される自分の場所があって、多様性が尊重されること。言語に縛られない表現とコミュニケーションということで、こちらも自己肯定感が向上したり、他者とのコミュニケーション、関係づくりが質的に向上します。

定期的に場所が用意されて、ちゃんとその大人が来ることが実は児童養護施設とかは大事だということを施設の職員から言われました。

最後ですけれども、ダンスワークショップの可能性について。ダンスアーティストのワークショップというのが、実際どんなことを行っているかということ、体ほぐしとかリラクゼーションとか、五感を意識するものだったり、あるいは表現としては個人での表現もあれば、グループとしてのグループワークの表現もあり、さらに即興と振り付けがあって、長期間行うのであれば作品作りまでやる。その際は音楽、美術、衣装を含めた総合表現になっていることも特徴だと思います。

そういう過程、プロセスを通じて自分を発見し、内なる自分を見つめる機会になる。他者との関係作り、他者理解、身体コミュニケーションをして、さらに自分を取り巻く周りの空間ですとか音ですとか自然ですとかそういうものを見つめ直すきっかけにもなっているのかなと思っています。こういう効果のあることは、困難な境遇にいる社会の中で周縁に追いやられてしまいがちな、居場所を失った心の回復を必要としている、そういう子どもたちこそダンスワークショップを必要としているのではないかと考えてやっているところです。

質疑

【猪崎】 4名の発表を、視点を変えてもダンスの可能性は同じところに行き着くのだなと思いがら聞かせていただきました。実践が非常に豊かに繰り広げられていることもよく分かりました。それでは4人の先生方にご質問いただきたいですけど、いかがでしょうか。

【フロア1】 日本女子体育大学の内堀と申します。堤先生に質問させていただきたいと思います。派遣されるアーティストが色々な方がいる中でこの学校にはこの人だということがあると思いますが、選抜理由というか、なぜそのアーティストをその学校に運んだのみみたいなところを決めている基準がありましたら伺いできたらと思います。

【堤】 明確な基準はありません。こんな子どもたちがいて、こんな体験を子どもたちにさせたいという希望をまず先方から聞きます。実際に、普段の授業を見学させてもらったりして、子どもの様子を観察し、いったん持ち帰って、じゃあ誰にしようというような感じです。事務局の中で実は色々吟味しながら決めています。

実際、同じようなアーティストが何回か色々なところに行ったりしている場合もあります。特別支援学校あるいは児童養護施設のようなところは経験の豊富な、われわれが何度かやっているアーティストに行ってもらえることが多いです。一方でアーティストを発掘するというのも大事な仕事になっています。

あまり子ども専門に何かやっているようなところには声を掛けてなくて、普段のそのアーティストの公演を見て、この人は考えていることが面白いな、新しいものを何か生み出そうとしているなというアーティストに基本的に声をかけている感じですよ。

【猪崎】 アートをしっかりと探求している人を派遣しているというふうに見えますが、先生いかがでしょうか。

【堤】 そうですね。だからそこが非常に主観的ですけども、事務局が見て面白いなとか、面白いというのは人によって色々価値観が違うと思うんですけども、そういうアーティストにお願いをしています。

【猪崎】 たくさんの方の芸術家に依頼して、学校の現場とか色々な場とつないでいるという数多い経験値は、今後役に立つと思います。皆さん他に。

【フロア2】 武蔵野美術大学で非常勤講師をしております。4人の先生方に共通していることは、「つなぐ」ということをそれぞれの持ち場でフルになさっていることでした。何か協力してほしい課題があればお一言ずついただきたいと思います。

【猪崎】 シンポジウムのテーマが「未来へつなぐ」ということなので、ダンス教育で教えている中で自分の課題を少し言っていただき、それがどうかたちで解消できるかという希望的なものを簡単に教えていただけますでしょうか。

【八木】 こういうダンス、ああいうダンスというふうに分けていきたくなくなってしまいうけれど、1人1人が経験していることの奥底には通底するものがあるところをどう伝えていけるかなという話です。

初めからその話をほんと投げ掛けてもなかなか伝わりにくい。だから、現代的なリズムのダンスで言えば例としてのHipHopを通して、文化的背景を持って生まれてきたリズムに乗ろうとする、また乗っていくことで文化のかたちや心持ちにも関心が生まれる。つまり、そこの中に本気で入っていった時にこんな体験が待っている、あるいは、今まさにそうした体験ができていたね、ということをごだけ丁寧伝えていけるか。それができればジャンルや形式が変わっても、「A-ha体験」につながるものが紹介できるのではないかなと考えています。

【猪崎】 色々な視点から見て、通底するというか、核のところはみんなそれぞれ一緒ではないかということをご今日確認できたと思います。大橋先生、お願いいたします。

【大橋】 私はまさにコロナ禍で中断したり縮小したりしている活動がたくさんあって、ポストコロナ、アフターコロナに向け変わっていいこととそれでも変えたくないこと、守らなきゃいけないことを見極めて、それをどうやって継続していくのか。もしくは新しいかたちを再創造して未来につないでいく方法があるのかといったことを考えています。

例えば、コロナ禍に生まれた赤ちゃんって3年間あまり人に触れられていないし、保育所や幼稚園でも保護者参加型の活動は激減しました。ここからどういうふうに立て直していくか、すぐには答えが見つからないとは思いますが、同じ想いの方々たくさん情報交換しながら、大事なものを共有して確かめていきたいと願っています。

【猪崎】 今向かっている壁ですよ。山崎先生、お願いします。

【山崎】 今、学校教育の中で行われている表現運動・ダンスの教育が、子どもたちの将来にどのように繋がっていくのかということ、具体的に子どもに伝えてあげたいなと思います。現在、ダンスが体育の中で「運動」として捉えられている視点を、多様な表現方法のひとつにある「身体表現」であることとして捉え、自分の思いを身体で表現するとき、生まれる踊り（動き）はそれぞれでいい、誰にでもダンスはできるということをご子どもに伝えたい。そしてそれが子どもたちの自信に繋がっ

ていくと思います。子どもにダンスのおもしろさを伝えるにはどうしたらいいかということ、そのために教師はダンスの特性と指導のポイントをどう理解してもらおうか、それが課題であり、さらに拡げていきたいことです。

【猪崎】 堤先生、お願いします。

【堤】 どんな子どもたちにもどんなワークショップを提供するのがいいのかということ、もう1つは継続的にやっていきたいけどなかなか継続的にやっていく基盤を作るというのは難しかったりすることが課題だと思います。

実は児童自立支援施設と少年院のプロジェクトはベネッセこども基金というところから支援してもらい、3年間で何とかかたちにしようというところでやっていますが、そのように長い視点で、中期的な視点を持ってやれるとだんだん広がりというものができていけるのかなと思っています。

【猪崎】 今直面している課題は、コロナ禍の中で子どもたちとちゃんと向き合えていないという怖さが教育の現場にはあると思います。その中でもダンスは距離を持ちながらうまくお互いに関わり合うことによって相手の表現したいものを引き出していくような試みを続けていってくだされば、SDGsの中での教育においてダンスが大きな注目を浴びるジャンルになってくるのではないかと、そういう希望を今日の4人の先生方のお話の中で見せていただいたような気がします。

【猪崎】：他にご質問ないでしょうか。

【フロア3】：佐分利です。私も障がいの人たちが混ざったダンスをやっているんですけど、20年ぐらいダンスをやっている人が、身に付いた技能を持ってどうやって社会とつながっていくんだろうというところ。例えば、鳥取は、障がい児のアートの大会などがありますが、見に来る人は家族から外になかなか広がらないのが問題で、もったいないなと思っています。自分が長くやってきたもので社会をつなぐ方法のヒントをいただきたいです。

【猪崎】 活動がどのようなかたちで広がっていき、伝播していき、また違う人が同じような活動ができるかというところで、先生方、何かそこでお考えありますでしょうか。

【八木】 ダンスとの関わりで様々なことが起きているわけですが、そういった情報が、例えば、集約されていて、そこをのぞいてみるとこんなことを求めている人がいることが見付けられる、マッチングのような場面があることですね。今はそれぞれがネットで調べれば良いという感覚もあるのかもしれませんが、例えば、舞踊学会にそんなデータベースがあるというふうになると可能性があるなと思ったのが1つ。もう1つは、たくさんの人たちと交流をして、その活動が広がって

くこともとても大事だと思うのですが、時間の長さも大事ですね。特定のサークル、特定のコミュニティの中だけでとても温かく大切に長く続いていることも大事だと私は思っていて、だから広がりも継続の両方を大切にしていきたいものです。

【大橋】 大学では学生が軸なので、囲わないで出していったって、その地域の人たちと触れ合うような仕組みをたくさん作っていくことが重要だと考えています。また地域で、演劇のワークショップやアートの取り組みが核にあるようなことをやっていって、その地域の人たちと触れ合うような仕組みをたくさん作っていくことが重要だと考えています。また地域で、演劇のワークショップやアートの取り組みが核にあるようなことをやっていって、その地域の人たちと触れ合うような仕組みをたくさん作っていくことが重要だと考えています。また地域で、演劇のワークショップやアートの取り組みが核にあるようなことをやっていって、その地域の人たちと触れ合うような仕組みをたくさん作っていくことが重要だと考えています。

【山崎】 学校におけるダンス教育が社会にどう広がっていくのか。学校で学ぶ際に、その子どもたちがダンスの価値を理解してくれることが、卒業してからの舞台（ダンスやミュージカル等も含め）鑑賞などの行動に繋がっていくと思っています。ダンスを観に行くこと、ダンスをする（踊る）こと、ダンス文化を支えること、ダンスについて知ること、ダンスへの関わり方は多様であり、自分なりのダンスとの関わり方は何だろうということが見つけられるような教育が大切だと思います。

【堤】 主に1人親家庭の子どもたちとワークショップを重ねていて、豊島子どもWAKUWAKUネットワークという別のNPOと協力していただきながらやっています。豊島子どもWAKUWAKUネットワークという団体は、子ども食堂ですかプレイパークですか学習支援とか、そういうことを豊島区のエリアでやっているNPOです。NPO同士がつながっていくことで、ダンスを色々な、例えば、今、学習支援で勉強をなかなか親に見てもらえない子どもがたくさんいて、そういう子どもを見ている団体っていっぱいあると思うんです。だけど実は子どもに足りないものは勉強だけじゃないんです。色々な経験が足りないんであって、そういうところとつながっていくことが結果的に色々広がっていくことになるのかなと思ったりしています。

【猪崎】 つながって、共通項ができたりすることによって社会に伝播していく可能性というのは強いかもしれませんが。グループが重なり合ってやっていたら、その重なり合ったところからまた違ったかたちで出てくるということなど、いかがでしょうか。今ダンスが社会の中でどのように受け止められて、そしてそれがどのようなかたちで広がっていくかというところは正念場だなという気はします。

【フロア4】 日本女子体育大学大学院の学生です。人の過去とかこれまでの経験、性別とか、そう

いうものを全て抜きにして、今そこにいるその子、その人丸ごとが享受される環境があって初めて舞踊が教育の中で意味をなしてくる。逆に言えば、それが体を動かすことによって自然に導かれることも舞踊教育の1つの良いところだと思います。自分もダンスをやる中で先生がいなくても一体になるとか、自分たちだけで好きに表現することに行き着いた時にすごく仲間と一体感を感じる経験がありました。それを教育者として経験されてきた先生方が実際に何かそこを超えるということに対してのきっかけとか、働きかけなど、それが教員の言葉なのか、体を動かすことなのか、何かありましたら伺いさせていただければと思います。

【猪崎】 お答えするとしたら、そういう教師から生徒へ受け渡しする壁というか境界があるのか。境界を越えられるのかとか、だからどういう教える場を作るということも含めて考えていくところかなと思います。先生方、いかがでしょうか。

【八木】 私は大学教員として「教える」立場にありはするのですが、ファシリテーションというようなことを念頭に置いています。あなたの中ではどんなことが起きているの？私の中ではこんなことなんだけど、というような。その刺激に乗って互いに芽が出てきた時になにか融解していく感じが、私の中では実感として起こります。そして、自分がとても楽しんでいること、感動していることをどんどん発信することも大事にしたいです。

【猪崎】 皆さんにお聞きするのでいいですか。

【大橋】 私は「人こそ環境」だと考えているので、その意味では「教師も環境」で、もっと言えば「環境でしかない」とも思っています。発達する主体は子ども自身であり、学ぶ主体も生徒、学生自身であるというふうに考えていくと、教師の役割は、より良い環境であり続けることだと思います。それに気づいた時、終わりが無いなとも思ったんですけど…。遊ぶことを楽しむ主体であり続けたいし、踊りもずっと楽しんでいたい。それを「～でなければいけない」と思ったら駄目だと思うので、そういう意味では自らが幸せで愉快に生きて、より魅力的な環境であり続けるということが一番の高い目標かなと思ながらやっています。

【山崎】 学校教育のダンスの授業では、子どもが本気になって踊り、自分のありのままを表現していいと思えるぐらいにその気にさせること。そして本気になった時に自分の身体表現をクラスの仲間が認めてくれるんだという安心できる場作り。この2つが、教師が子ども同士の動きのやり取りを引き出すためのきっかけであり大事なポイントであると考えます。

【猪崎】 堤先生、お願いします。

【堤】 私がやっている活動ですと、結局、アーティ

ストが行ってやるわけなので、アーティストはそもそも教えるつもりはない。その場を刺激的ない時間にしたいということでやっているんだと思います。ワークショップとは何かというとその定義は難しいと思うんですけど、ワークショップは本来、一方向じゃなくて双方向というか色々な関係性が緩く変化していく場所だと思うんで、そういうものを目指しているという感じです。

【猪崎】 今日のスィンポジウムを皆さんと一緒に共有できましたこと、本当にありがたく思いますし、舞踊学会としてこれからもダンスの可能性を強く発信していかなければいけないと思います。ありがとうございました。